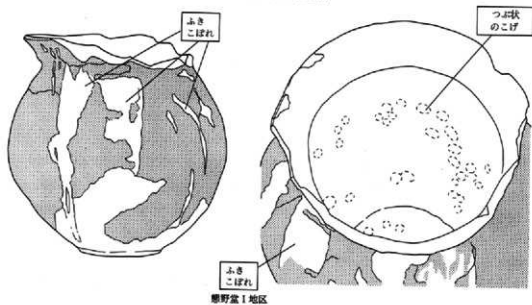
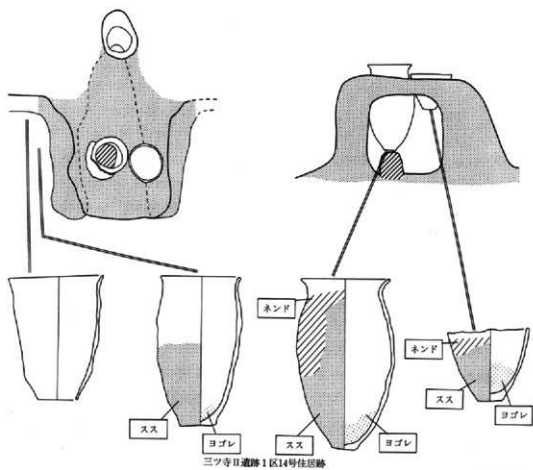
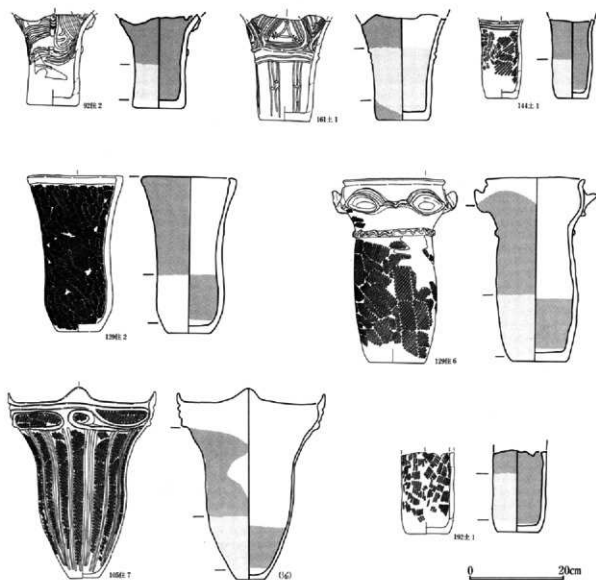


III まとめと考察



第480図 甕の変色部分と使用復原例 (外山・1992)

15. 土器に認められる変色部分について

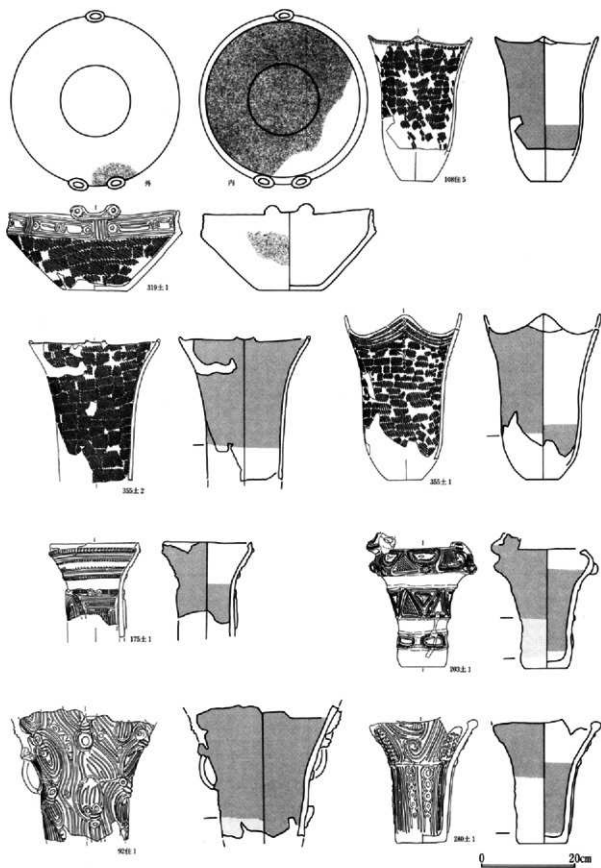


第481図 縄文土器に認められる変色部分



第482図 縄文土器の変色部分から復原した使用方法 (武藤・小林他1978)

III まとめと考察



第483図 銅文土器に認められる変色部分

## 16. 平安時代の集落変遷について

本遺跡周辺ではいくつかの平安時代の遺跡が調査されているが、一番近いのは同じ前橋伊香保線の建設により調査された北へ130m程の地点に位置する金竹西遺跡である。同遺跡では古墳時代後半から平安時代前半の集落80軒以上が調査されており、古墳時代後半のもの15軒、古墳時代末から奈良時代前半のもの23軒、奈良時代中頃から後半のもの22軒、奈良時代末から平安時代前半のもの17軒が検出されている。道路部分だけの調査であり、集落の中に細長い大きなトレンチを入れたようなものであるが、そこから古墳時代後半にはじまるこの集落の盛衰が看取できる。最も興味深いのはその終末である。9世紀代のあるものはあるものの10世紀代のもは1軒もない。10世紀になるとそれまでそこにいた人々はどこか別の場所へ行ってしまう人もいなくなってしまうのである。そこよりも更に北に位置する同じ道路建設により調査された熊野遺跡でも9世紀末から10世紀初頃になると住居数は激減し、やがて姿を消してしまうという全く同様の現象が見える。その人々が移動した別の場所こそが今回報告する本遺跡なのではないかと考えている。

本遺跡では平安時代の後半、10世紀半ばに近い前半になってはじめて住居が営まれる。この時期を第1期とする。それ以前は小ピットが数基ある程度であり、掘立柱建物跡になりそうなものも確認されていない。10世紀前半段階に属するものは26・48・58・67号住居跡の4軒が確認されているだけである。その配置を見ると真ん中の現道を挟んで北側に2軒、南側に2軒となっている。しかもその間隔はほぼ一定して並んでいるように見える。この遺跡での礎を築いた拠点的な住居と考えられる。カマドは3軒は東壁南寄りで作られており、確認できなかった26号住居跡も東壁南寄りと考えられる。67号住居跡のように縦長のものもあるが、それ以外は隅丸方形かやや横長となっている。

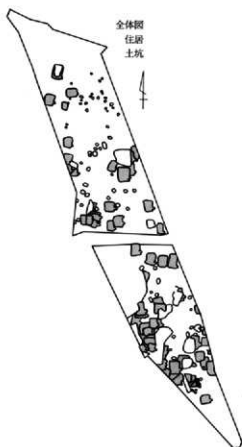
次の10世紀後半になると住居が激増する。この時

期を第2期とする。この時期に属すると考えられる住居跡は31軒が確認された。全体の分布状況を見ると調査区の北部は隙間が開くが、それ以南はかなり目一杯に広がっているのが分かる。中央西部の陣場岩層なだれの高い部分には攪乱もあり、不明な点もあるが、ほぼそこを取り巻くように環状に分布しているように見える。その中には7ヶ所の重複があり、2～3軒が5ヶ所、1ヶ所だけであるが、多いもので8軒、この場所は間の遺物が少なく時期判定不能の1軒を挟み、その隣まで入ると10軒の重複となり、次いで多いのが4軒1ヶ所の重複である。

現在の土器編年観でいくと一番多いところでは50年位の間に1ヶ所に8軒から10軒が重複していることになり単純に割ると5年で建て替えていることになってしまう。さらに11世紀代のもも含めると13軒以上の重複となる。最大で17～18軒程度が同時に存在していた可能性がある。また、重複関係から建て替える動きを見ると52・51号住居跡のように西→東、40・39・38号住居跡のように東→西の東西の動きのあるものと71・72号住居跡のように北→南、77・45・46号住居跡のように南→北の南北の動きのあるものが認められる。重複の激しい部分ではその両者の動きが重なる部分もある。カマドの位置は第1期と同様で東壁の南寄りのものがほとんどである。72号住居跡は南壁西寄りの可能性がある。

さらに11世紀代になるとややバラける傾向があるが依然として多い。この時期を第3期とする。第3期に属すると考えられるものは22軒が確認された。第2期では北部に空白地帯があったが、その部分にも住居が再び出現する。重複部分は7ヶ所あり、一番多いところで4～5軒で2ヶ所、その他は2から3軒で5ヶ所である。10世紀後半で重複の激しかった部分の南西に一部重なるところもある。54・55・56・82・86号住居跡のように少しずつ位置をずらしながらもほとんど同じ場所に建て替えているところもある。別に空いている場所があるにも関わらずそこを選地しているのはそこが先祖伝来の土地であるとか、何か特別な意味があったものと思われる。

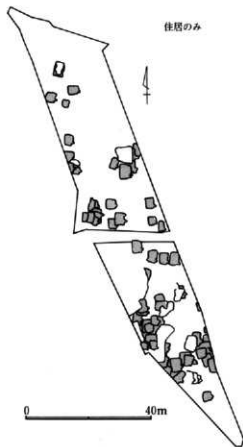
### III まとめと考察



第484図 平安時代遺構配置図

23・85・24・75・80号住居跡のように東→西にずらしながら同規模で建て替えているところ、60・59号住居跡のように北→南に移動しているところもある。この動きにも何かしらの意味があるものと思われる。80号住居跡のみ主軸がずれるので、カマドの位置も南壁の西寄りになっているが、その他は全て東壁の南寄りに付けられている。80号住居跡の主軸がずれているのは11世紀代でも後半に属するものと思われ時期的な問題もあるのかもしれない。56号住居跡のように縦長のものもあるが、ほとんどは隅丸方形もしくは横長となっている。

全体を通して見た場合でも北部はやや住居が粗になり、その部分には土坑やピットが集中している。見ようによっては円形に配置されているようにも思える。掘立柱建物が立つ可能性も完全には否定できないが、比較的丁寧に調査したがそうなるものは確認

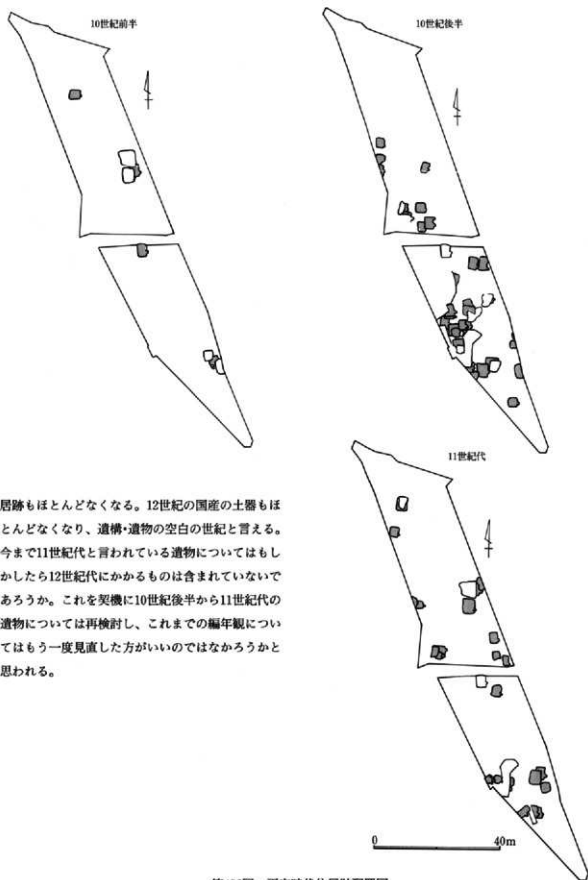


第485図 平安時代住居跡配置図

できなかつた。土坑の群の中には隅丸長方形の土坑もあるので、その場所は基城となる可能性も考えられる。いずれにしても通常の住居域とは区別されるような空間であったことが伺える。

住居跡については重複が激しく場所によっては地山と同じか地山の方が狭いくらいの所もあり、その帰属する時期を決めるに当たっても明確に判別できないものも多くあった。出てきた遺物、特に土器のこれまでの編年観に基づいて時期判定を行った。しかし、県内でもこの時期のものはかなりたくさん出土しているようでも比較的少ない。

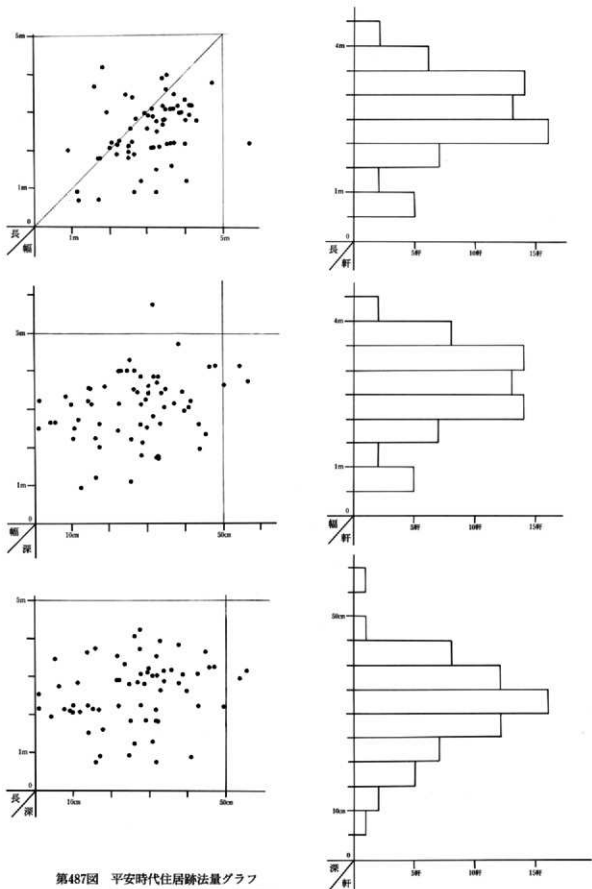
これまで11世紀代の住居跡については1つの集落を調査してもせいぜい数軒程度であり、この遺跡のように何10軒もの多くのものがまとまって出土した例はあまり聞いたことがない。次の12世紀になると住居の形態も大きく変化するものと思われ、壁欠住



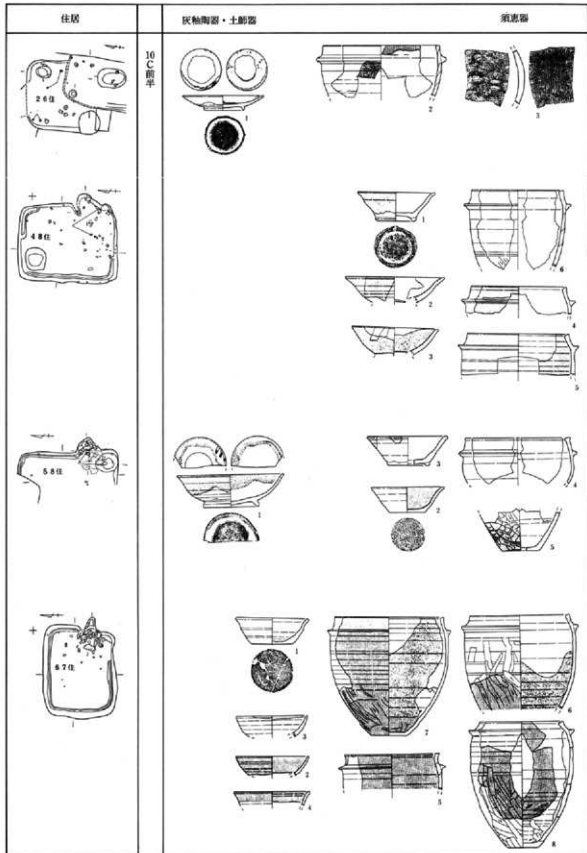
居跡もほとんどなくなる。12世紀の国産の土器もほとんどなくなり、遺構・遺物の空白の世紀と言える。今まで11世紀代と言われている遺物についてはもしかしたら12世紀代にかかるものは含まれていないであろうか。これを契機に10世紀後半から11世紀代の遺物については再検討し、これまでの編年観についてはもう一度見直した方がいいのではなかろうかと思われる。

第486図 平安時代住居跡配置図

III まとめと考察



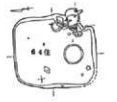

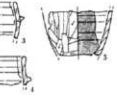
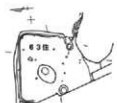
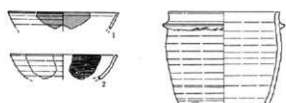
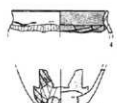

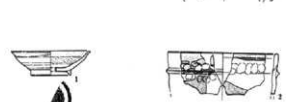






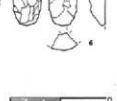
第487図 平安時代住居跡法量グラフ  
(長さ、幅、深さ、数量相関図)



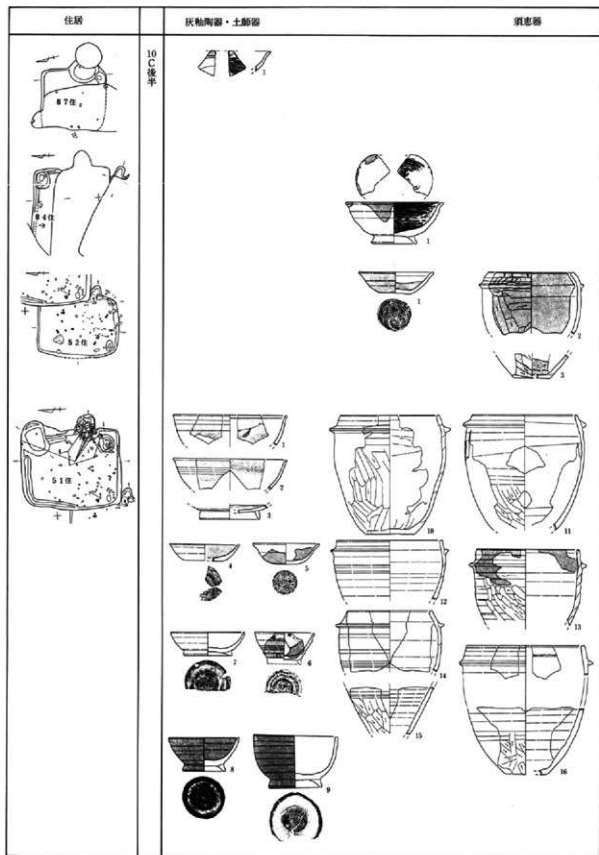
第488図 平安時代住居跡時期区分表1 (10世紀前半)



III まとめと考察

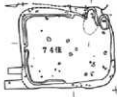

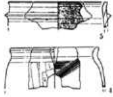

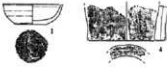
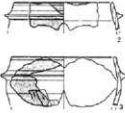





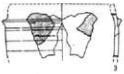



住居	10C後半	灰釉陶器・土師器	須恵器
 <p>44住</p>			
 <p>63住</p>			
 <p>61住</p>			
 <p>78住</p>			
 <p>53住</p>			

第489図 平安時代住居跡時期別区分表2 (10世紀後半)

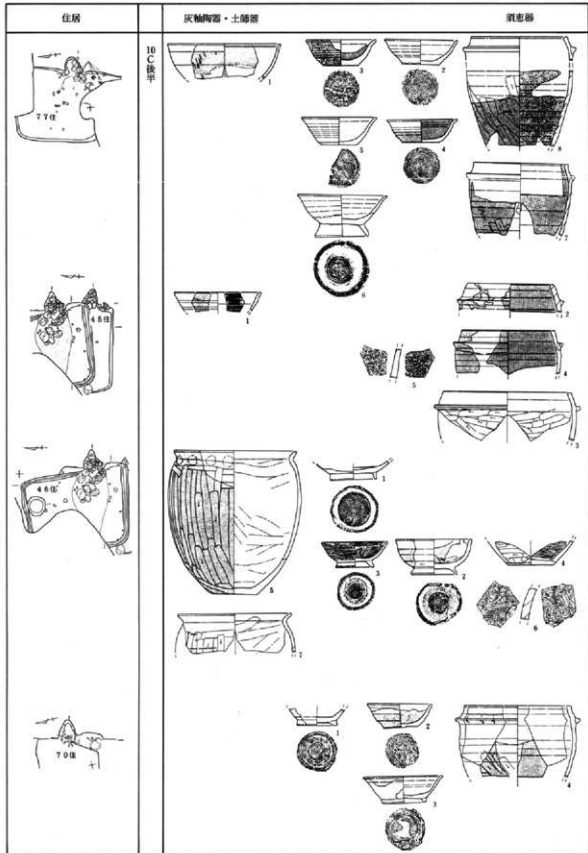


第490図 平安時代住居跡時期別区分表3 (10世紀後半)

III まとめと考察

住居	灰釉陶器・土器	須恵器
 <p>74B</p>		
 <p>73B</p>		
 <p>88G</p>		
 <p>71B</p>		
 <p>72B</p>		

第491図 平安時代住居跡時期別区分表4 (10世紀後半)

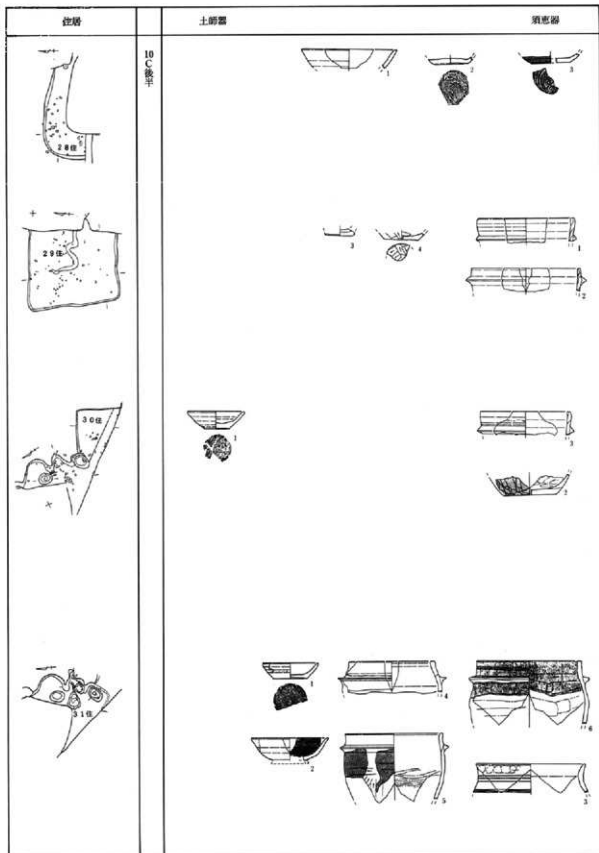


第492図 平安時代住居跡時期別区分表5 (10世紀後半)

III まとめと考察






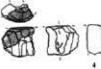


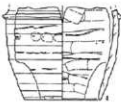


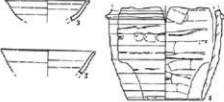
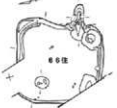
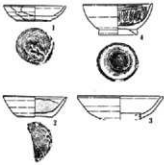
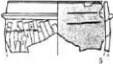

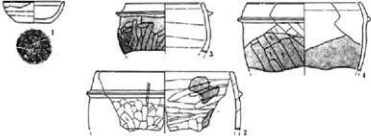
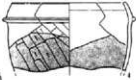
住居	10C後半	灰釉陶器・土器器	須恵器

第493図 平安時代住居跡時期別区分表 6 (10世紀後半)

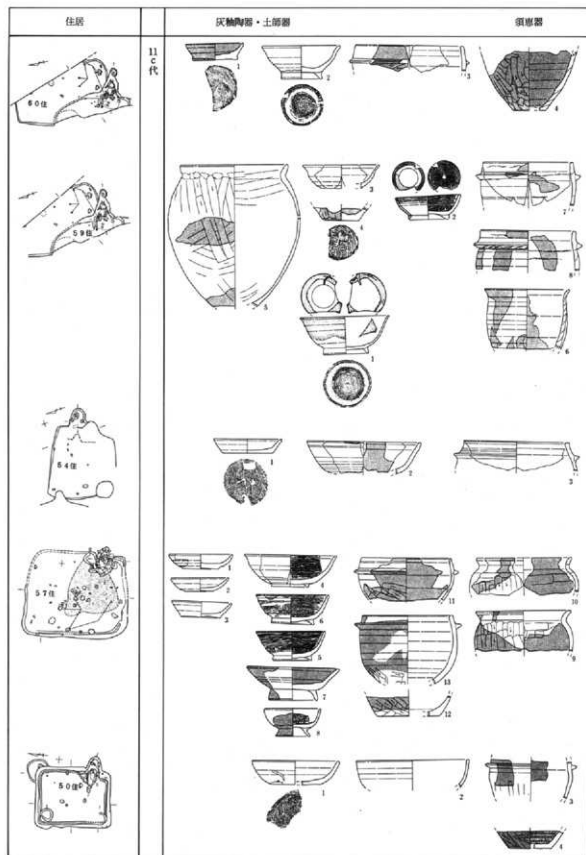


第494図 平安時代住居跡時期別区分表7 (10世紀後半)

III まともと考察

住居		土師器	須恵器
	10 C 後半		
			
	11 C 代		
			
			
			

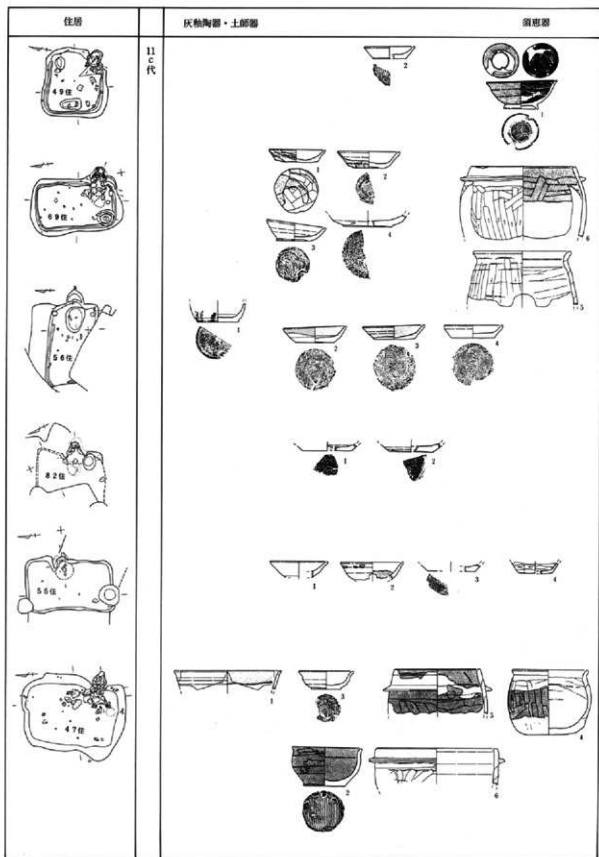
第495図 平安時代住居跡時期別区分表 8 (10世紀後半)



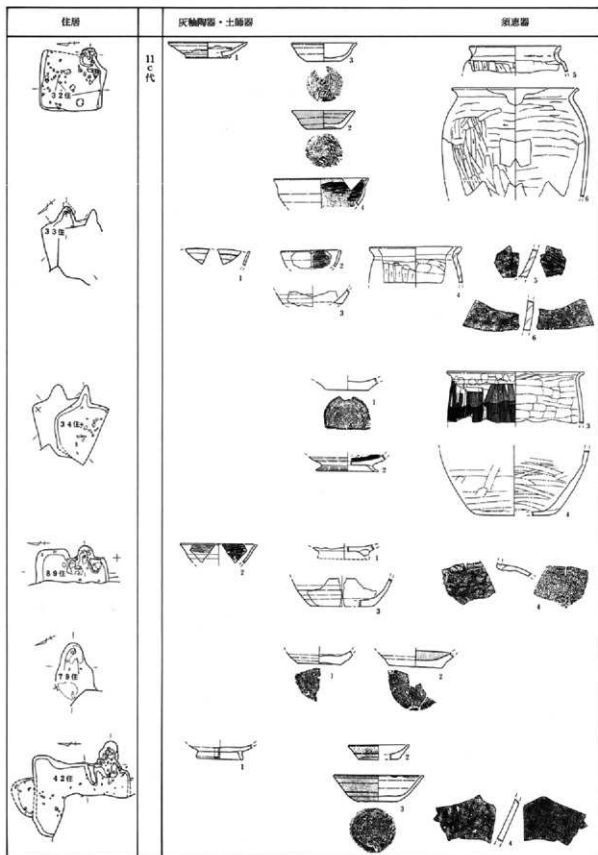
第496図 平安時代住居跡時期区分表9 (11世紀代)



III まとめと考察

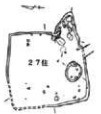
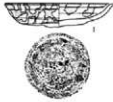
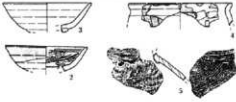




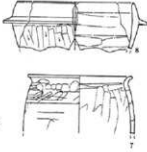

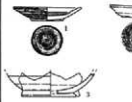
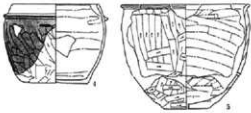


第497図 平安時代住居跡時期別区分表10 (11世紀代)



第498図 平安時代住居跡時期別区分表11 (11世紀代)

III まとめと考察

住居	区別陶器・土師器	須恵器
	<p>11 C 代</p> 	
		
		
		

第499図 平安時代住居跡時期別区分表12 (11世紀代)

## 17. 平安時代の土坑について

本遺跡の平安時代以降の土坑については、平面形と断面形の組み合わせにより何種類かに分類できたが、ここでは掘り方が浅く皿状を呈するものや小形なもの等を除き、それ以外をもう少しまとめて考えてみることにしたい。

ここではその平面形態に着目し改めて断面も見ることにはしたい。まず、①平面形がほぼ円形を呈するものと②隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈するものに分類することができると思う。①では底面が平坦なものや丸みを持つものがあるが、掘り方は比較的浅く、断面皿状もしくはそれに近いものが多い。ところか②では底面が平坦なものも多く、壁はあまり開かず直立もしくはそれに近い状態で立ち上がるものも多く、断面は平底もしくは丸平底となるものが多い。掘り方は①よりもやや深い。

ここで注目したいのが、②の隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈するものである。大きき的には長径1.5~2.0m以下で短径1.0m前後のものも多く、土壌墓の可能性も捨てきれないと思われる。平安時代の人々の土坑墓は県内でも10数例しか見つかっておらず、当時の墓制についてはほとんど判っていない。壁が焼けていたり、焼土や炭が入っていないもので副葬品がでてきた土坑について土壌墓として取り扱っている例が多く、実際に骨が出てきたと言う例はまだ知られていないように思われる。代表的なものとしては清里・長久保遺跡1号土壌墓や下東西SZ16土壌墓、下佐野遺跡59号土壌墓・113号土壌墓、芳賀東部団地遺跡F182土壌墓、国分寺中間地域D区第6号土壌墓、同第8号土壌墓、同G区第7号土壌墓、荒砥北部遺跡群1号土壌墓、空沢遺跡HD-6号土壌墓、金古北十三町遺跡11区1号土壌墓などがあられる。これらの土壌墓は平面形は隅丸長方形を呈し、規模的には長径が1.5~2.0m以下で短径1.0m前後のものも多く、本遺跡で検出された②の土坑群と一致する。国分寺中間地域G区第7号土壌墓の場合には底面に木炭を敷き詰めており、日高遺跡51号土

墓の場合には棺床に丸太材を敷き、下佐野遺跡113号土坑墓の場合には川原石の石敷きを施し、金古北十三町遺跡11区1号土壌墓の場合には底面に6個の石を置き、その上場を同じレベルにし、棺を安定させたものと思われる。これらの土壌墓の主軸はその大半が南北を向いており、頭がどちらを向くかは別にしても埋葬時に一定の方向を意識したことが伺える。金古北十三町遺跡11区1号土壌墓の例のように須恵器椀の完形品が1点出ているところが頭であるとすれば北枕であったことになる。時期的には10世紀の半ばと推定され、本遺跡の②の土坑群に近似した時期のものである。こうした土壌墓は県内で検出されるのはその遺物から9世紀の後半から10世紀代のものがほとんどと考えられている。

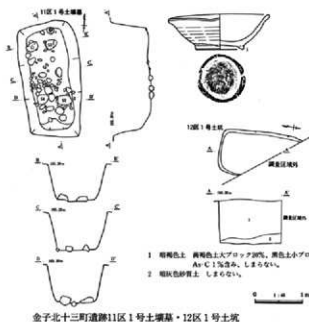
清里・長久保遺跡1号土壌墓では灰釉・緑釉陶器、下佐野遺跡59・113号土壌墓、日高遺跡51号土壌墓、芳賀東部団地遺跡F182号土壌墓、国分寺中間地域G区7号土壌墓などでは灰釉陶器が出土しており、当時から貴重なものが副葬されている。その一方で金古北十三町遺跡11区1号土壌墓や空沢遺跡HD-6号土壌墓、国分寺中間地域D区第8号土壌墓のように日常一般的に使用するような須恵器や土器の椀・杯・皿といったものを副葬している例もある。また、金古北十三町遺跡12区1号土坑のように11区1号土壌墓と規模や深さ、主軸の方向性まで類似するのにもまったく副葬品のない例もある。これらの差は当時における貧富の差や階層の差や大人と子供の差、男女の差等のなんらかの差を示すものか、現在は残っていないが有機質で腐ってしまうもの、たとえば漆器等が入れられていたのかもしれない。単純に今我々が調査して何も出てこないからといって何も入れられていなかったとか、貧しい人の墓だとかということはいえないのではなかろうかと思われる。類例としては何も出てこない例の方が圧倒的に多いのでそう考えられてしまうのであろうが、その点には注意を払っておく必要がある。何も出てこない土坑がどうか決めかねることが多いのも事実であるが。

### III まとめと考察

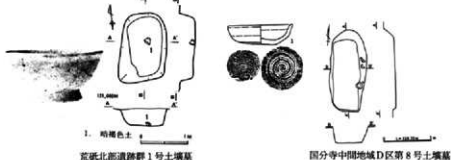
本遺跡の場合には遺物はほとんどの土坑で時期判定に使用出来るようなものはあまりなかったが、39・41・65・70号土坑で羽釜や須恵器碗・灰釉陶器碗等の破片が検出された。それ以外に遺物の大半を占めるものは縄文時代の土器・石器等であった。

本遺跡では隅丸方形の土坑は住居群との位置関係を見ると住居跡のないところに作られていることが分かる。しかし、住居とはそれほど遠くには離れていない。しかも集落内のある部分にまとまる傾向が見えるので、一定の場所をなんらかの方法で囲い、居住する場所とは分けていた可能性は考えられる。これらの土坑が墓塚であるとすれば、その場所が墓城となる。

今後は遺物の出土する墓塚とそうでない土坑との比較検討を重ね、遺物はないけれども墓塚と推量されるものを抽出し、研究することも必要であろう。



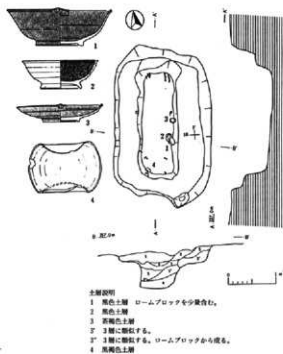
金子北十三町遺跡11区1号土坑墓・12区1号土坑



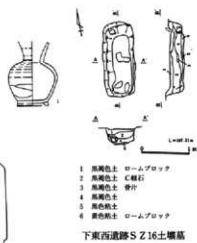
高坂北部遺跡群1号土坑墓

8世紀			9世紀			10世紀			11世紀		
前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後
.....有蓋短頸壺使用火葬墓											
.....日常雑器転用骨甕器使用火葬墓											
.....土葬土坑墓											
.....火葬土坑墓											
.....石製骨甕器使用火葬墓											

第500図 上野国の古代墓制変遷関係図(津金澤1986)

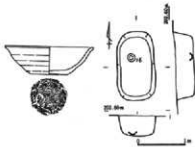


清里・長久保遺跡1号土坑墓



下東西遺跡S Z 16土坑墓

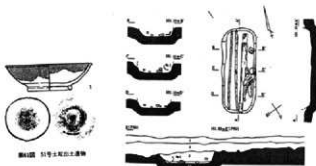
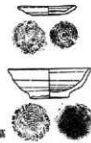
第501図 群馬県内平安時代土坑墓1



空沢遺跡HD-6号土坑墓



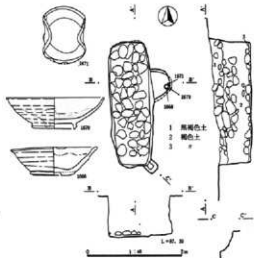
国分寺中間地域D区第6号土坑墓



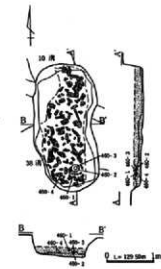
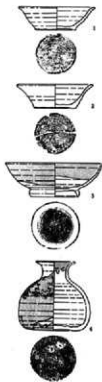
- 1 黒褐色土層 粘質土。上面は平安末期面で、下方はその前作期遺土層。(10～11世紀初頭までの間の土層)
- 2 黒褐色土層 砂質で部分的に砂礫層が見られ、水の氾濫を感じさせる。(9世紀末～10世紀初頭が下層)
- 3 黒褐色土層 粘質土。地山(鉄2%4)の混入色シト質のブロックを多く含み、人為堆積を感じさせる。
- 4 黒褐色土層 粘質土。3より黒色味が強く、有機質の多さを感じさせる。
- 5 淡黄灰色土層 シルト質。

- 1～2の層目は余り明確でないが、3～4の層目は明確。

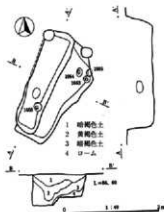
日高遺跡S1号土坑墓



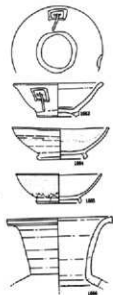
下佐野遺跡7区113号土坑



国分寺中間地域G区第7号土坑墓



下佐野遺跡7区59号土坑



## 18. 鉄器について

鉄器については、この遺跡では鉄釘9点や刀子9点の他に鉄鏝8点、紡錘車1点、不明1点、近世の火打ち金1点計29点を図示した。近世の火打ち金1点を除く平安時代の鉄器の割合を%で示すと鉄釘32.1%、刀子32.1%、鉄鏝28.6%、紡錘車3.6%、不明3.6%となる。鉄釘や刀子の割合が高いのはさほど他の集落の場合と違いはないと思われるが、この遺跡では鉄鏝の割合が高いように思われる。

鉄釘については笠の部分があるものは1点のみであり、頭が幅広になるように敲き潰しているもの1点であった。それ以外は笠も先端も欠損したものであった。また、横に直角に曲がっているものも1点あった。断面形を見るとほとんどのものが方形であるが、第42号住出土の10は上部がやや丸くなっており、釘ではない可能性もある。本文中では紡錘車の心棒としたがやや太いので、鍔金具の中央の部分の可能性も考えられる。

刀子については平面形を見ると刃縁がやや内反りしているものが多く、かなり長い間大切に使用していたことがわかる。茎部分についてはかなり長いものが多いようである。

紡錘車58号住出土の20は径6cmの円板の中央に5mm程の孔の開くものであり、中央の心棒は検出されなかった。

52号住出土の15は羽釜の鉤状に反る鉄器であり、何かから剥がれたようにも見える特徴的な形態をとるものであるが、全体としてどのような形態をしていたのかは不明である。また、被熱を受け焼けているのも特徴的である。

鉄鏝は形態的には平面形は長三角形もしくは柳葉形のものも多く、逆刺のあるものと先が二つに分かれる雁股形のものそれぞれ1点のみであった。先端が極わずかに反っているものが多く、それが土中で錆びたために曲がった可能性も否定できないが、もしかしたら使用したために曲がったのではないと思われる。また、頸部の長さについてはそれぞれ

違うものの、関の形態についてはすべて台形であり、その点については共通している。茎部については欠損しているものも多いが、残っているものから推定するとかかり長いものが多いようである。

E区9-31グリッド出土の27は断面形を見ると下端が部厚くなっており、また平面形を見ると下縁がやや波打っているのがわかる。さらに左端は細くなっており、中央に最大幅がきている。下縁の波は使用した際にできる反り返りであり、火打ち金と考えられる。グリッド出土であるので時代的には明確ではないが、本遺跡では若干の近世の陶磁器等も出土しているため、近世と考えた。

平成7年度調査部分でも平安時代の住居跡から鉄鏝が出土しており、この周辺を含めるとかなりの数の鉄鏝がまだ埋蔵されている可能性もある。鉄鏝が多いということが時代的な特徴なのか、それとも地域性の違いによるものなのか、今回ははっきりとさせることはできなかった。今後周辺地域の平安時代の鉄鏝を集成し分析する必要があると思われる。

最後に平安時代の磨石・敲石・凹石及び砥石等の鉄器と関連した石器について若干触れておきたい。この時期のものは一見したところは縄文時代のものとなら変わるところはない。敲いてあったり、磨ってあったり、敲きが集中すれば凹みとなる。石材は現在にも繋がる砥沢石などの流紋岩製の比較的小形の砥石も出土しているが、大形品は粗粒輝石安山岩などの粗い石が多く用いられており、その点についても縄文時代のものと類似している。砥石はその対象物の形をトレースするから鉄器を研いだ時の傷と石器を研いだ時の傷には明らかに違いが認められる。更によく見るとその表面には鉄錆が付いていることがある。研ぎ傷の上に錆が付着していれば砥石と考えてまず間違いないと思われる。また、調査している時に道具の刃先が当たればそこが錆びることがある。それと鉄器を加工する時に敲いたものとは似た状態になることがあるが、よく観察すればその判別は差程難しくはない。傷と錆の状態で判断するのが一番適切と思われる。

## 引用参考文献

- 神田考平1886『太古石器考』  
鳥居龍藏1924『遊訪史』第一巻  
大野雲外1906『石斧の形式について』『東京人類学会雑誌』21-24  
大野雲外1907『打製石斧の形式について』『東京人類学会雑誌』22-25  
大山 柏1927『神奈川県新磯村石器館遺物包含地調査報告書』『史前学研究会小報』第1号  
奥田成・岡田謙・野村陽一郎1941『紅銅網々ミ鉄の農業』『大南洋・文化と農業』太平洋協会編  
鹿野忠雄1946『紅銅網々ミ鉄と石器』『東南亜細亞民族学先史学研究』矢島書房  
藤森栄一1948『日本焼畑跡の謎問題』  
塚田光1964『群馬県・新巻遺跡の中期縄文土器』『下総考古学』1 下総考古学研究会  
松本正信・加藤史郎1968『手斧考』『考古学研究』15-1 考古学研究会  
野村陽一郎1969『紅銅網々ミ鉄の経済的および社会的構造に関する研究』『岐阜大学農学部農業経済学研究室研究業績』第1号  
藤森栄一1970『縄文農耕』学生社  
白石浩之1970『日野吹上遺跡』日野吹上遺跡調査会  
佐々木公明1971『編作以前』日本放送出版協会  
西村正樹1972『阿三台土器編年研究概要』『早稲田大学研究紀要』18  
群馬県教育委員会1973『群馬県遺跡地図』  
齊藤基生1974『平山遺跡』東京西區及び八王子支庁遺跡調査会  
佐藤達夫1974『土器型式の実態—五領ヶ台式と膝塚式の間—』『日本考古学の現状と課題』  
小林静夫1976『縄文中期の打製石斧』『ドルメン』10 JICC出版局  
小林公明1977『縄文中期ハケ岳南麓における農具としての石器』『信濃』24-4  
前原 豊他1978『F,竹宮遺跡』昭和52年度発掘調査概報 藤岡市教育委員会  
大塚昌彦他1978『空沢遺跡』茨城県教育委員会  
武藤雄六・小林公明他1978『曾利』長野県志木町教育委員会  
齊藤基生他1978『貫井』小金井市文化財調査報告書5 小金井市教育委員会  
戸沢充周1979『縄文農耕論』『日本考古学を学ぶ』2 有楽園選書  
赤山香造1980『三原田遺跡(住居編)』群馬県企業局  
中島宏1980『伊勢塚・東光寺塚』埼玉県遺跡発掘調査報告書第26集  
若手県教育委員会・国鉄盛岡工事局1980『西田遺跡』若手県文化財調査報告書第51集東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書VII  
能登健1981『阿玉台式土器』『縄文土器大成2 中期』  
鳥島義明他1982『南大塚遺跡』寄居町教育委員会  
松村和男1982『打製石斧』について。『下野原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第8集  
宮坂光昭1982『縄文中期農耕論』『季刊考古学』1 鎌山園  
赤山香造1982『竪穴住居』『縄文文化の研究』8 鎌山園  
青木秀雄・西井幸雄・松村和男他1983『前原遺跡』宮代町文化財調査報告書第1集  
山口修1983『塚屋・北塚屋』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第25集  
鈴木敏昭・松村和男他1983『合群地(1)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第27集  
齊藤基生1983『打製石斧研究の現状』『信濃』35-4  
小池彰・成瀬英司・山口剛志・千葉香蔵1983『打製石斧について』『自由学園南遺跡』自由学園  
戸沢充周1983『縄文農耕』『縄文文化の研究』2 鎌山園  
鈴木次郎1983『打製石斧』『縄文文化の研究』7 鎌山園  
東原文雄1984『大野雲外論』『縄文文化の研究』10 鎌山園  
坂井雄他1984『熊の堂塚田地区、雨倉遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団  
野村一寿1984『嵐沢町跡遺跡第1号住居址出土土器とその類別の位置付け』『中部高地の考古学』長野県考古学  
高坂慎二・西井幸雄他1985『北塚屋(II)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第48集  
多摩市教育委員会・多摩市遺跡調査会1985『和田・百草遺跡群、落川南遺跡』多摩市埋蔵文化財調査報告書8  
石塚和則1986『縄文時代中期中間の住居形態』『研究紀要』埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
坂口 一・三浦京子1986『奈良・平安時代の土器の編年』『群馬県史研究』24 群馬県史編纂委員会  
川本素行1986『打製石斧の分析』『古代』81 早稲田大学考古学  
多摩市教育委員会他1986『和田・百草遺跡群』多摩市埋蔵文化財調査報告書10  
真下高幸・松村和男他1986『下野原遺跡』群馬県教育委員会  
菊池実他1986『三後穴遺跡、十二原遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団  
相原建史1986『清里・長久保遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団  
石塚和則・西井幸雄他1986『得野塚遺跡—縄文時代—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集  
麻生敏雄・木津博明・松岡正信1986『上野園分寺寺・尼寺中間地域(1)』群馬県埋蔵文化財調査事業団・群馬県教育委員会  
堀田雄二・小林真寿他1986『不動坂遺跡群II・古原敷遺跡群II』長野県東部町教育委員会  
津金澤吉成1986『古代の墓制』『群馬県史通史編2』原始古代2  
塚本新也他1987『福河塚・大野塚』栃木県埋蔵文化財調査報告書第84集栃木県文化振興事業団  
大塚昌彦・小林良光・白石典之他1987『行幸山遺跡』茨城県教育委員会・群馬県企業局・日本道路公団  
山口彦弘1988『新巻遺跡出土土器について』『十周年記念論集』群馬県埋蔵文化財調査事業団  
赤山香造1988『三原田遺跡』『群馬県史資料編1』一原稿・古代一  
下城正他1989『大平台遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団



### III まとめと考察

- 山口逸弘・松村和男他1989『房戸遺跡Ⅰ』群馬県埋蔵文化財調査事業団  
宮井英一・西井幸雄他1989『古井戸—縄文時代—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第73集  
外山政子1989『群馬県地域の土器遺構について』群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要6  
赤山春造・小宮俊久1990『三原田遺跡第二巻』群馬県企業局  
福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・日本道路公団1991『法正瓦遺跡』東北横断自動車道遺跡調査報告11  
外山政子1992『おかかマドか—もう一つのマド構造について—』群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要10  
菊池実1993『縄文時代多孔石の研究』群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要11  
瀧野巧1994『金竹西遺跡』吉岡町教育委員会  
羽島政彦・松田光太郎1994『富士見地区遺跡群愛宕山遺跡初室古墳・愛宕遺跡・日向遺跡』富士見村教育委員会  
岡安雅彦1994『黒斑にみる弥生土器焼成方法の可能性』三河考古第7号  
瀧野巧1995『熊野・辺玉遺跡』吉岡町教育委員会  
岡安雅彦1996『縄文土器焼成方法復原への実験的試み』古代学研究第133号  
細野高伯他1996『鼻毛石中山遺跡』宮城村教育委員会  
大工原豊1996『中野谷松原遺跡—縄文時代遺構編—』安中横野平工業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 安中市教育委員会  
堤隆・山口逸弘他1997『川原田遺跡』御代田町教育委員会  
宮跡研究会編1997『古代の土器器生産と焼成遺構』真跡社  
大賀健他1997『下藤田遺跡』関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書 日本道路公団・群馬県教育委員会・下仁田町遺跡調査会  
千田幸生・田口修他1997『新堀東原ヶ原遺跡』関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書 日本道路公団・群馬県教育委員会・松井田町遺跡調査会  
長谷川福次1997『六反田遺跡Ⅱ』北橋村埋蔵文化財発掘調査報告書第22集 北橋村教育委員会  
新治村教育委員会1998『布種上原遺跡』  
竹内寛1999『熊戸ヶ原遺跡（A区）』大間々町埋蔵文化財発掘調査報告書第4集 大間々町教育委員会・大間々町歴史民俗館  
長谷川福次1999『北橋村内遺跡Ⅳ』北橋村埋蔵文化財発掘調査報告書第27集 北橋村教育委員会  
山下歳信1998『群馬県の中期中葉から後葉の様相』『中期中葉から後葉の様相』第11回縄文セミナー 縄文セミナーの会  
飯森康広他1998『冷水村東遺跡・西原分析田遺跡・金古北十三町遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団  
井上慎也1999『砂押遺跡』『中野谷地区遺跡群発掘調査報告Ⅴ』安中市教育委員会  
長谷川福次1999『桃町土器—特徴と分布・変遷、その役割—』土曜考古学会研究会1999年5月例会発表要旨  
岡安雅彦1999『企画展 弥生の技術革新「野焼きから覆い焼きへ」—東日本を駆け回った土器焼成技術—』安城市歴史博物館図録

## IV 自然科学分析

### 1. 沼南遺跡の地質調査

株式会社 古環境研究所 早田 勉

#### (1) はじめに

群馬県域には、浅間火山や榛名火山など多くの火山から噴出したテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が分布している。これらのテフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされているものがあり、遺跡においてそれら示標テフラとの層位関係を求めることによって、土層の形成堆積年代や遺構・遺物の年代に関する資料を収集できるようになっている。そこで、良好な土層の断面が認められた沼南遺跡においても地質調査を行い、土層の層序および示標テフラの層位についての記載を行うことになった。

#### (2) 土層の層序

沼南遺跡では、基盤として岩屑なだれ堆積物が認められた。この岩屑なだれ堆積物（層厚30cm以上）は灰色を呈し、角礫（最大径181mm）を多く含む。この堆積物は、その岩相や後述する層位などから榛名山南東部の山体崩壊に由来する陣場岩屑なだれ堆積物（早田, 1991）に同定される。この堆積物の層位は、約1.9-2.4万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group, 新井, 1962, 早田, 1995, 未公表資料）の上位にあり、約1.7万年前に浅間火山から噴出した浅間大窟沢第1軽石（As-OP1, 中沢ほか, 1984, 早田, 1995）の下部にある（早田, 未公表資料）。

陣場岩屑なだれ堆積物の上位には、下部より褐色土（層厚23cm）、成層したテフラ層（層厚35cm）、黄褐色土（層厚23cm）、暗褐色土（層厚16cm）、黄色および灰色の軽石に富む暗褐色土（層厚18cm、軽石の最大径3mm）、黒褐色土（層厚16cm）、黄褐色砂質土（層厚52cm）、礫を含む灰色砂層（層厚24cm、礫の最大径2.2mm）、褐色土（層厚14cm）、暗褐色土（層厚34

cm）、黒褐色土（層厚5cm）、黄色軽石層（層厚4cm、軽石の最大径13mm）、下部の軽石層に由来する黄色軽石混じり黒褐色土（層厚4cm）、成層したテフラ層（層厚2cm）、黒褐色土（層厚17cm）、黒褐色砂質土（層厚12cm）、表土（層厚19cm）が認められる（図503）。

下部の成層したテフラ層は、下部より黄色軽石層（層厚18cm、軽石の最大径21mm、石質岩片の最大径2mm）、黄灰色細粒火山灰層（層厚0.4cm）、桃色粗粒火山灰層（層厚1cm）、橙色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚1cm）、褐色細粒火山灰層（層厚3cm）、細かく成層した灰色粗粒火山灰層（層厚7cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚1cm）、桃色細粒火山灰層（層厚3cm）からなる。このテフラ層は、その層相から約1.3-1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石（As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992）に同定される。

As-YPの上位にある黄色および灰色の細粒軽石は、その岩相から約1.1万年前に浅間火山から噴出した浅間総社軽石（As-Sj, 早田, 1990）に由来すると考えられる。黄色軽石層は、その層相から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石（As-C, 新井, 1979）に同定される。なお本遺跡において、As-Sjの上位でAs-Cの下部にある砂層については、層位から総社砂層（早田, 1990）に対比されると考えられる。発掘調査では、この砂層のすぐ上位の褐色土から縄文時代早～前期の土器が、またその上位の暗褐色土から縄文時代中期の土器が各々検出されている。遺物との層位関係から、本遺跡における総社砂層の離水は、前橋域に比較して若干早い可能性もある。

As-Cの上位の成層したテフラ層は、下部の桃紫色細粒火山灰層（層厚0.9cm）と上部の黄褐色細粒火山灰層（層厚0.8cm）から構成されている。このテフラ層は、層相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名ニッ岳流川テフラ（Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992）に同定される。さらその上位の黒褐色砂質土中に含まれる粗粒火山灰は、層位から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B, 新井, 1979）

IV 自然科学分析

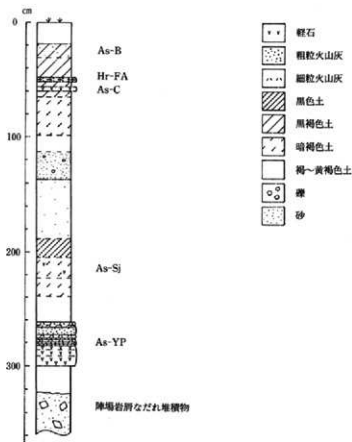
(3) 小 結

沼南遺跡において地質調査を行った結果、陣場岩屑なだれ堆積物(約1.7万年前)の上位に、下位より浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 約1.3-1.4万年前)、浅間総社軽石(As-Sj, 約1.1万年前)、浅間C軽石(As-C,

4世紀中葉)、榛名ニツ岳淡川テフラ層(Hr-FA, 6世紀初頭)、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)の堆積が認められた。縄文時代早～中期の土器はAs-Sjの上位にある総社砂層のさらに上位で、As-Cの下位から検出されている。

文 献

- 新井房夫 (1962) 「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要自然科学編』10 p. 1-79.  
 新井房夫 (1979) 「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル』No53 p.41-52.  
 町田 洋・新井房夫 (1976) 「広域に分布する火山灰—給良 Tn 火山灰の発見とその意義」『科学』46 p.339-347.  
 町田 洋・新井房夫 (1992) 『火山灰アトラス』東京大学出版会, 276p.  
 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦 (1984) 「浅間火山、黒姫～前期のテフラ層序」『日本第四紀学会講演要旨集』No14 p.69-70.  
 坂口 一 (1986) 「榛名ニツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器」群馬県教育委員会編『寛延北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』p.103-119.  
 早田 勉 (1989) 「6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害」『第四紀研究』27 p.297-312.  
 早田 勉 (1990) 「群馬県其自然と風土」『群馬県史通史編』1 p.39-129.  
 早田 勉 (1995) 「テフラからさぐる浅間山の話動史」『御代田町誌 自然編』p.22-43.



第503図 沼南遺跡の地質柱状図

## 2. 沼南遺跡出土土器の胎土分析

東京芸術大学保存科学教室 建石 徹

## (1) はじめに

縄文時代中期前中葉の群馬県地域は、土器型式の吹きだまりともいふべき複雑な型式組成を示すことが以前から知られた地域である（塚田1964、佐藤1974、赤山1991、山口1990・1992など）。筆者らは宮城村鼻毛石中山遺跡出土土器群の胎土分析をおこない、これらの事象と実際の人、土器、情報等の動きの相関に関する基礎的情報を蓄積したことがある（建石・大沢1996、建石1996）。本稿は、吉岡町沼南遺跡出土のほぼ同時期と考えられる土器群の胎土分析をおこない、同様の視点からの分析資料の蓄積を目指すものである。沼南遺跡出土の縄文時代中期前中葉土器群は、鼻毛石中山遺跡を含む周辺の当該期遺跡群と同様、勝坂式、焼町(式)、阿玉台式、大木式等、多様な土器群を含むものであるが、たとえば鼻毛石中山遺跡より利根川本流に近く立地する沼南遺跡の性格と出土土器の胎土の特徴の相関等、興味深い課題が山積する。

鼻毛石中山遺跡の研究では、土器胎土を粘土と混和材に分けた場合の粘土部分を主要な分析の対象としたが、本稿もこれを踏襲する。先の研究ではこの際、蛍光X線分析法による化学組成の検討と粉末X線回折法による鉱物組成の検討を採用したが、本稿では紙面や分析期間の都合もあり、先の研究で特に有効と考えた蛍光X線分析法を中心に分析をおこない検討を加えることとした。

## 1. 資料（試料）

分析に供した個体を第504、505図、第1表に示す。分析個体は主に遺構出土遺物とし、しかも型式学的な検討が充分可能な完形・半完形土器を中心に、一部、重要と思われる破片資料を加えて選出した。個体の選出にあたっては、松村和男氏、山口逸弘氏の全面的な協力を得た。

分析資料の詳しい型式学的記載については、第三章を参照されたい。

## 2. 分析方法および結果

土器胎土の原料が、マトリクスである「粘土」部分（以下、粘土とよぶ）と、河川砂などの「混和材」部分（以下、混和材とよぶ）の混合土（以下、素地土とよぶ）であると仮定する。本研究は、胎土の自然的特徴を根拠に、土器の移動などに関する基礎的情報を蓄積することを主な目的とするが、特に粘土の由来を検討することで、この課題と取り組むこととする。これは筆者らが、縄文土器製作技術の多様性、複雑性を認める一方で、粘土と混和材では、粘土の方が、より製作地付近から採取される可能性が高いと考えていることを前提としている。粘土の由来を検討することが、製作地を検討するうえでも有効であると考えたい。しかし、粘土と混和材を明瞭に識別、分離することは困難である。ここでは、肉眼で確認できる大型の鉱物粒子や岩片（混和材に由来する可能性が高い）を分析対象から極力除外することで問題に対応する。

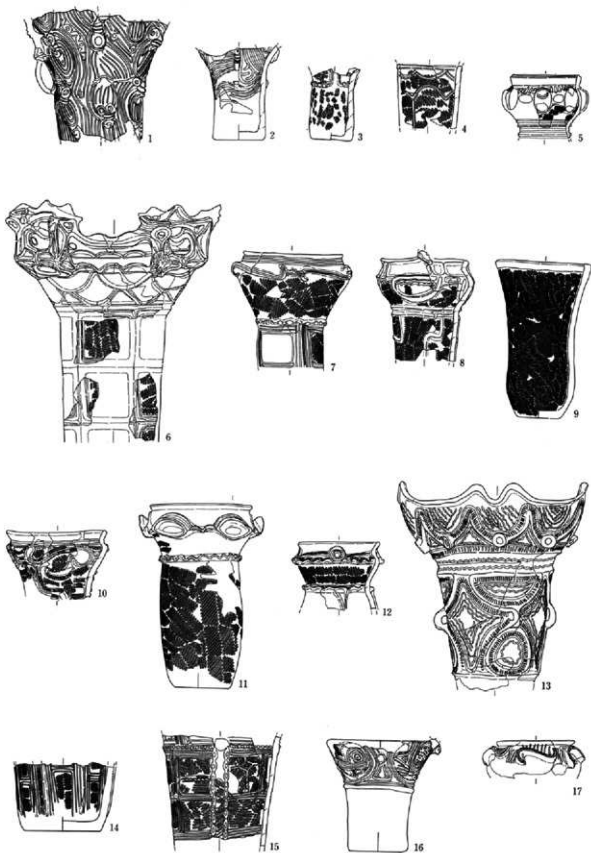
## (2) 蛍光X線分析による化学組成の検討

## 2-1. 分析の原理と方法

ある元素をその吸収端より短い波長のX線で励起すると、その元素の特性X線が発生する。これを蛍光X線といい、それぞれの原子に特有の波長およびエネルギーをもっている。蛍光X線の波長あるいはエネルギーとその強度を測定することによって、その元素を同定する方法を蛍光X線分析という。本研究では、蛍光X線のエネルギーとその強度を測定する方法（エネルギー分散型分析法）を採用した。

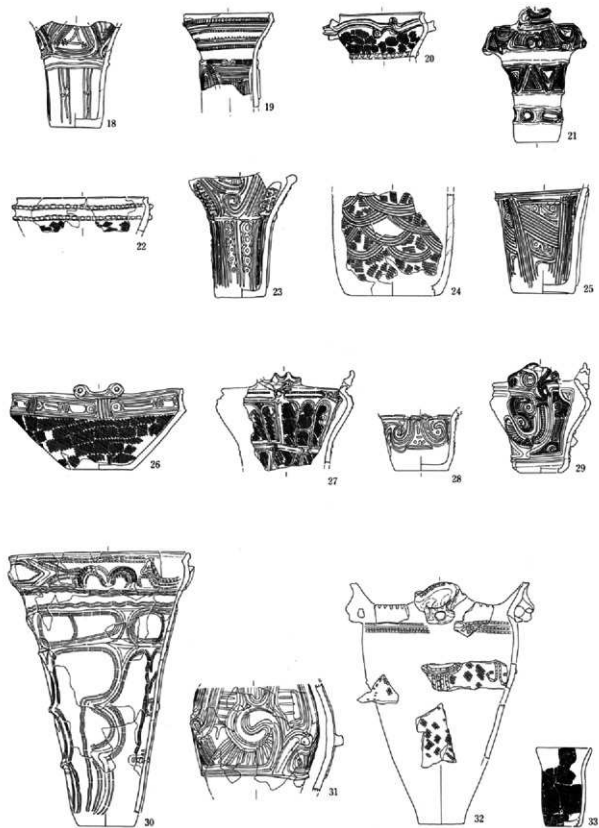
分析装置はセイコー電子工業製、エネルギー分散型SEA-2001を用いた。分析条件は次の通りである。X線発生部のターゲット…Rh管球、電圧…15kV、電流…80～170 $\mu$ A（試料ごとに変更）、照射径…3mm、検出器…Si(Li)半導体検出器、室内雰囲気…真空、測定時間…300秒。

IV 自然科学分析



第504图 胎土分析资料 1

2. 沼南遺跡出土縄文土器の胎土分析



第505図 胎土分析資料 2

#### IV 自然科学分析

定量分析は、装置装備のファンダメンタルバラメーター法によった(標準試料なし)。試料を超音波洗浄し、乾燥させた後、分析に供した。

分析対象とした元素はSi、Ti、Al、Fe、Mg、Ca、K、Mnの8元素である。土器胎土の主成分元素組成は、岩石学の慣例にしたがい酸化物として表記した。本研究では標準試料を用いなかったため、定量性には優れないが、各試料間の比較や傾向を知るというレベルでは影響ないものと判断した。また、Naについては本条件での定量が困難なため測定しなかった。

#### 2-2. 胎土の不均一性の問題

過去の筆者らの研究と同様、本研究でも同一個体内の胎土の不均一性を考慮し、各個体ごとに測定位置を変えて5回ずつ測定をおこなった。分析に供した34個体をすべて5回ずつ分析した後、個体ごとの結果のまとまりをみるために、170回(5回×34個体)の測定結果をクラスター分析(最長距離法)に供した。この結果、5回の測定結果が同一のクラスターを形成した個体については、5回の平均値を計算し、これをその個体の主成分元素組成とした。5回の測定結果がばらつく個体については、さらに6回目、7回目の分析をおこない、5つの測定結果が同一のクラスターを形成した段階で5回の平均値を計算し、これをその個体の主成分元素組成とした。本研究では8回以上の測定が必要だった個体はなかった。クラスター分析には、SPSS社製多変量解析ソフトSPSS7.5.1Jを使用した。

#### 2-3. 蛍光X線分析の結果

蛍光X線分析の結果を第1表、第506図に示す。土器胎土の主要成分が粘土(風化鉱物)であると仮定し、その上で、粘土採取地域を考察する場合、理想的な岩石(風化による影響の少ないもの)との単純な比較という作業は好ましくない。特に化学組成の検討では、風化の過程で溶解する成分を理解することが重要となる。

第506図は、比較的溶解による影響が少ない(母岩の状況を反映する)と考えられるFeを縦軸に、Siを横軸にとったものである。この図では各プロットが概ね負の相関を示すことが理解できる。ここには取り上げなかったが、新鮮な火成岩の分析結果もほぼ同一ライン上にのる。分析結果が左上にプロットされる試料ほど、アンゼン岩質の母岩に由来する粘土であり、右下にプロットされる試料ほど、カコウ岩質の母岩に由来する粘土であると考えられる。

### 3. 考察—型式学的検討との相関—

#### 3-1. 勝坂式土器

勝坂式に分類したものは、No9、15、18、19、21、29、31の7個体である。

勝坂式は当該期の群馬地域の主たる土器群であるが、南関東地域や甲信地域の土器群とは多少異なる型式学的特徴を備える個体が優勢であることが知られている(山口1992、小林他1996など)。また、阿玉台式や大木式に分類される個体の中に勝坂式との折衷的特徴をみいだせるものも多い(たとえばNo13、6)。

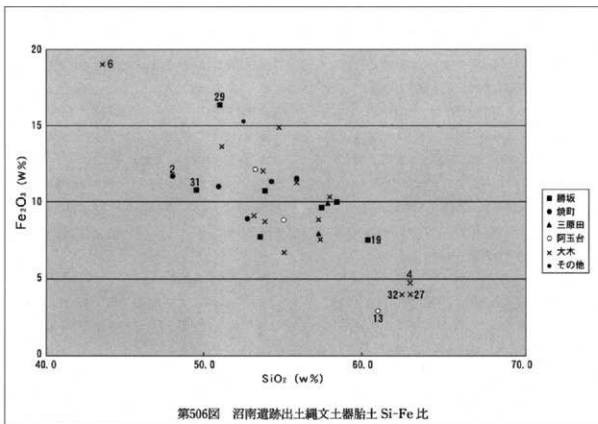
沼南遺跡出土の勝坂式の分析結果は、概ねアンゼン岩的な在地の地質の特徴と一致し、しかも分析試料中のほぼ中央を中心に分布する傾向がうかがえる。後述する焼町(式)土器等と同様、分析に供した個体の多くが在地的な粘土で製作されている可能性を示唆するものである。

この中で他の勝坂式と異なる胎土の傾向を示すものは塩基性よりのNo29、31、酸性よりのNo19である。No29は、屈折底をもつ器形や把手の形状等、南関東大宮台地・武蔵野台地以西の勝坂V式と共通する型式学的特徴を有する。No31は、膨張した筒型の器形や省略された隆線上の扱い等、南関東下総台地周辺の勝坂V式と共通する型式学的特徴を有する。南関東地域はアンゼン岩より塩基性よりの火成岩であるグンブ岩の特徴を備える富士山の地質学的影響の強い地域である。即断は出来ないが、これらの土器が南関東の各地域の粘土によって製作された可能性も

## 2. 沼南遺跡出土縄文土器の胎土分析

第1表 沼南遺跡出土縄文土器の主成分元素組成表 (W%)

分析No.	遺構	遺構内No.	土器型式	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>
1	92住	1	焼町	1.7	30.0	53.1	0.7	1.3	1.0	0.1	12.1
2	92住	2	焼町	1.6	34.3	47.9	0.7	2.3	1.0	0.5	11.7
3	92住	3	大木8a	2.0	30.7	57.2	0.7	1.2	0.6	0.1	7.5
4	92住	4	大木8a	2.0	27.1	62.9	1.3	0.8	0.7	0.5	4.7
5	104住	1	三原田	2.3	26.3	57.7	0.5	2.1	1.2	0.0	9.9
6	104住	2	大木8a	0.3	34.0	43.5	0.5	1.6	1.0	0.1	19.0
7	116住	2	大木8a	0.8	28.1	57.8	0.4	1.2	1.3	0.1	10.3
8	116住	3	大木8a	0.7	27.1	54.6	0.8	0.5	1.4	0.1	14.8
9	129住	2	勝板後平	1.1	28.1	58.3	0.5	0.7	0.7	0.5	10.0
10	129住	4	阿玉台IV	0.8	31.4	53.1	0.6	0.4	1.5	0.1	12.1
11	129住	6	三原田	2.3	28.9	57.1	1.1	1.2	0.9	0.2	7.9
12	129住	10	大木?	1.5	29.3	55.7	0.5	0.4	1.0	0.3	11.3
13	130住	1	阿玉台II	2.2	30.6	60.9	1.4	0.7	1.2	0.0	2.8
14	103土坑	2	大木8a	2.5	29.2	57.1	0.5	0.9	0.9	0.1	8.8
15	103土坑	3	勝板後平	1.7	28.7	57.3	0.5	1.2	0.9	0.1	9.6
16	140土坑	1	焼町	2.2	26.0	55.7	1.2	2.3	1.0	0.2	11.5
17	143土坑	1	大木8a	2.5	32.6	53.0	0.5	1.1	0.8	0.1	9.1
18	161土坑	1	勝板後平	1.6	35.2	53.4	0.5	0.7	0.7	0.2	7.7
19	175土坑	1	勝板後平	2.5	26.4	60.3	0.7	1.8	0.7	0.1	7.5
20	201土坑	1	大木8a	2.0	33.1	53.7	0.3	1.3	0.7	0.1	8.7
21	203土坑	1	勝板V	3.0	29.3	53.7	0.9	1.1	1.1	0.1	10.7
22	279土坑	1	大木8a	2.1	34.2	54.9	0.5	0.8	0.8	0.1	6.7
23	280土坑	1	焼町	1.4	33.8	52.6	0.6	1.8	0.8	0.1	8.9
24	284土坑	1	大木8a	1.1	31.7	51.0	0.4	0.8	1.1	0.2	13.6
25	285土坑	1	焼町	1.3	34.5	50.8	0.1	1.4	0.6	0.3	11.0
26	319土坑	1	大木8a(残跡)	0.7	31.0	53.6	0.3	1.6	0.8	0.1	12.0
27	319土坑	2	大木8a	1.8	28.5	62.9	1.1	0.9	0.8	0.0	3.9
28	429土坑	1	焼町	4.4	26.5	54.1	0.9	1.5	1.1	0.2	11.3
29	172pit	1	勝板V	0.1	20.8	50.9	1.5	7.9	2.4	0.1	16.3
30	Dx29	7	阿玉台II	2.0	30.8	54.9	1.5	0.4	1.4	0.0	8.8
31	En36	1	勝板V	2.0	35.3	49.4	0.2	1.4	0.8	0.1	10.8
32	ES34	1	大木8a	1.6	28.7	62.4	1.0	0.8	1.4	0.3	3.9
33	遺構外	2	(ミニチュア)	2.8	24.4	52.4	1.2	1.0	2.0	1.1	15.2





#### IV 自然科学分析

ある。Na19は、ラッパ状の器形、口縁部の横走する文様要素の残存等、在地的な型式学的特徴を備えた個体と考えるが、周辺では具体的な類例は乏しい。胎土は他の勝坂式と比べ、酸性よりの異質な特徴を示す。ここではこれ以上の検討は控えたが、今後は遺跡周辺にも酸性の強い地質が皆無ではないことを考慮する一方、(酸性の強い地質がよく知られている)北陸地域など、今回、積極的に類例を探さなかった地域へも目を向けた総合的な検討が必要となる。

#### 3-2. 焼町(式)土器、三原田型土器

焼町(式)に分類したものは、Na1、2、16、23、25、28の6個体、三原田型に分類したものは、Na5、11の2個体である。

焼町(式)、三原田型いずれも群馬県西部地域の地質的な土器群として知られる。ただし、焼町(式)の方が分布が広く、浅間山西南麓にまで分布が及ぶ(むしろ長野県側に分布の中心があるとされる(堤1997など))。

沼南遺跡出土の焼町(式)、三原田型の分析結果は、概ねアンサン岩的な在地の地質の特徴と一致し、しかも分析試料中のほぼ中央を中心に分布する傾向がうかがえる。先述した勝坂式土器等と同様、分析に供した個体の多くが在地的な粘土で製作されている可能性を示唆するものである。

この中で他の焼町(式)、三原田型と異なる胎土の特徴を示すものは塩基性よりのNa2である。Na2を型式学的に遺跡周辺の土器群中で異質とみなすことは現状ではできない。勝坂式におけるNa19と同様、粘土の産地に関する議論は保留としたい。

今回の分析では、アンサン岩的性格という意味では同様の傾向を示す浅間山の東西(群馬県と長野県)での相違を指摘することが困難であることを指摘しておく必要がある。また、同じ在地の土器群とはいえ、焼町(式)はより塩基性、三原田はより酸性によった胎土の傾向があることは注目される。

#### 3-3. 阿玉台式土器

阿玉台式に分類したものは、Na10、13、30の3個体である。

阿玉台式は当該地域では客体的な存在として知られ、特に後半段階である阿玉台Ⅲ式、Ⅳ式期にはその傾向が顕著である。また前半段階である阿玉台Ⅰ式、Ⅱ式期の土器群には勝坂式との折衷的特徴を有する地域的な土器群が多く含まれていることが知られている(山口1990など)。

Na10は、口唇が外半するキャリバー型の器形、横位S字状の口縁部文様意匠等に大木式と共通する特徴を有する。Na30は、体部上半に横位展開する楕円区画意匠等に勝坂式と共通する特徴を有する。これらの特徴は当該地域の阿玉台式の地域的特徴と一致する。両者はいずれもアンサン岩的な在地の地質の特徴と一致し、しかも分析試料中のほぼ中央を中心に分布する傾向がうかがえる。両者は細別時期が異なるが、先述した勝坂式、焼町(式)、三原田型の多くと同様、在地的な粘土で製作されている可能性を示唆するものである。

Na13は、酸性よりの胎土の特徴を示す。隆線上の扱い、文様構成等に勝坂式と共通する特徴を有する。同様の土器群は当該地域より東側、たとえば茨城県南部・千葉県北部地域などでの出土が知られる。茨城県南部・千葉県北部(特に現利根川下流地域)の一般的な地質学的特徴としてカコウ岩的な酸性よりの傾向が知られるが、分析結果はこれとよく調和する。またNa13は、肉眼観察で多数の雲母類の大粒粒子が確認できるが、雲母類はカコウ岩の主要な造岩鉱物である。

#### 3-4. 大木式土器

大木式に分類したものは、Na3、4、6、7、8、10、14、17、20、22、24、26、27、32の14個体である。

今回出土した大木式の多くは大木8a式に分類されるもので、分析資料の多くもこの範疇である。ただ、大木8a式には地域的な変異型が多く含まれ、

## 2. 沼南遺跡出土縄文土器の胎土分析

当該地域では特にその傾向が顕著であることが知られている。大木8a式の地域的な変異の検討は、(大木8a式という枠組み自体の再検討も含めて)各地で推進されるべき重要な懸案でもある。

沼南遺跡出土の大木式の分析結果は、概ねアンゼン岩的な在地の地質の特徴と一致し、しかも分析試料中のほぼ中央を中心に分布する傾向がうかがえる。前述した勝坂式土器、焼町(式)、三原田型の多くと同様、分析に供した個体の多くが在地的な粘土で製作されている可能性を示唆するものである。

この中で他の大木式と異なる胎土の特徴を示すものは塩基性よりのNa6、酸性よりのNa4、27、32である。Na6は、文様意匠等に勝坂式と共通する部分も認められるが、きわめて異質な型式学的特徴を有する個体である。同様の資料は北橋村道訓前遺跡での出土が知られるが、いまだ類例に乏しい。ここでは、具体的な粘土採取地の検討を控え、他の土器群と異なる胎土をもつことのみを指摘しておく。Na4、27、32は、連続弧状意匠(Na4)、LRの単節縄文施文(Na27、32)、幅狭の楕円区画意匠(Na27)等、いずれも遺跡周辺より北東側、たとえば福島県・栃木県北部地域の大木式と共通する特徴を有する。福島県・栃木県北部の一般的な地質学的特徴としてカコウ岩(またはリュウモン岩)的な酸性よりの傾向が知られるが、分析結果はこれとよく一致する。

鼻毛石中山遺跡の研究では、多くの大木式が在地

的な胎土の特徴を示したが、この点で沼南遺跡の大木式の在り方は異なる可能性がある。鼻毛石中山遺跡と沼南遺跡の比較では特に大木式に大きな相違が認められる。

### (3) おわりに

今回の分析を終え、群馬県地域の縄文時代中期前中葉土器群の胎土分析結果を一つ重ねるといふ所期の目的は、概ね達成できたものと考えている。本研究の成果や派生する課題を一言で表現することは困難であるが、最大の成果は、先の鼻毛石中山遺跡の研究の成果とは異なる人、モノ、情報の動きが沼南遺跡に認められる可能性が指摘できたことであろう。詳細は先の考察にゆずるが、例えば大木式の在り方の相違に両遺跡の個性の一端が認められる。今後、他の分析を併せておこないながら沼南遺跡に関する情報をより豊かにする一方、周辺他遺跡に関する情報の蓄積を進めていきたい。

### 謝 辞

本研究を進めるにあたり、多くの方々のご協力を得た。特に松村和男氏、山口逸弘氏には分析資料の選出から分析結果の検討まで、あらゆる場面でご協力、ご教示をいただいた。野中麗奈氏には資料採取の際、ご協力をいただいた。記して感謝する次第である。

## 文 献

- 香山道造「どのようにして三原田式が生まれたか—半世紀起線文字法の系統について—」『群馬県立歴史博物館紀要』12
- 小林謙一・建石徹・間間俊明1996『IV2-1 土器』『鼻毛石中山遺跡』宮城村教育委員会
- 佐藤達夫1974『土器型式の実態—五領ヶ台式と勝坂式の間—』『日本考古学の現状と課題』吉川弘文館
- 建石徹1996『縄文時代中期における土器の移動に関する基礎的研究—群馬県鼻毛石中山遺跡の分析を中心に—』『土曜考古』20
- 建石徹・大沢正人1996『V 鼻毛石中山遺跡の胎土分析』『鼻毛石中山遺跡』宮城村教育委員会
- 塚田光1964『群馬県・新巻遺跡の中期縄文土器』『下総考古学』1
- 山口逸弘1990『群馬県における阿玉台式の遺構相—新巻遺跡出土土器の分析を中心に—』『群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要』7
- 山口逸弘1992『新道式土器群の変容過程—利根川上流域を中心として—』『群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要』9



群馬県埋蔵文化財調査事業団  
調査報告第259集

## 沼南遺跡

(本文編)

(主)前橋伊香保線地方特定道路整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

平成11年12月20日 印刷  
平成11年12月25日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
〒377-8555 勢多郡北郷村大字下箱田784番地の2  
電話 (0279) 52-2511 (代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社